様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１５日現在

機関番号：４２６９４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０７５４
研究課題名（和文）　がん患者の外見変化に対応したサポートプログラムの構築に関する研究

研究課題名（英文）　Study on Establishment of a Support Program Concerning Physical Appearance Changes of Cancer Patients

研究代表者
野澤　桂子（NOZAWA　KEIKO）
山野美容芸術短期大学・美容総合学科・教授
研究者番号：30469449

研究成果の概要（和文）：本研究は、がん患者の QOL を向上させて治療意欲を高め、社会復帰を促進するための、「エビデンスに基づく外見関連の患者サポートプログラムの構築」を目的とする。具体的には、外見変化の実態と患者ニーズに関する数量的研究を通して基礎的なデータを収集するほか、外見のケアに関する先進国フランスの調査などを実施した。その結果をふまえて、段階的患者サポートプログラムの試案（成人患者版・思春期患児版）を作成した。最終年度には、プログラムをさらに改良し発展させるために必要な有用性の検証と普及に向けた研究にも着手した。

研究成果の概要（英文）：This study aims for “Establishment of an Evidence-based Patient Support Program Related to Patients’ Physical Appearance” in order to enhance treatment motivation of patients with carcinoma by improving their QOL and to facilitate their social reintegration. Specifically, we collected basic data through quantitative studies on actual conditions of patients’ appearance changes and their needs. We also researched the situations in France, which is advanced in the care of patients’ appearances. Based on those findings, we developed trial plans of stepped patient support programs different for adult and adolescent patients. In the final year, we have commenced verification of usefulness necessary to improve and further develop the program as well as studies for the program penetration.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：がん患者・外見・副作用・サポートプログラム・QOL・美容・小児癌・フランス

１．研究開始当初の背景

がん医療の領域においては、顔や身体の一部の切除といった外見に対する侵襲性の高い手術や抗がん剤治療、放射線治療などが行われる。このような他者の目にも見える部分

の容貌変化は、自尊感情を低下させ、引きこもりや抑うつ感を増大させる契機となっている。にもかかわらず、疾病の重大性ゆえに生存率や延命率が重視され、患者の外見に関する苦痛やそのケアに対する数量的な学術的研究は、脱毛などの一部の副作用を除き、ほとんど行われていない。しかし、外見の問題は患者の支援を考えるうえで重要である。すなわち、一方では、治療技術の進歩により長期生存者が増加し、治療を継続しながら社会生活を営むことができる時代を迎えている。他方では、患者が苦痛を感じる副作用の症状も、身体要因から心理社会的要因の比重が高まっている(Griffin、1993)。そして、外見の問題の重要性は、働き盛りの若年がん患者の増加や入院期間の短縮化、外来治療環境の整備などにより、今後さらに高まるものと考えられる。実際に欧米では、look good…feel better のように、がん患者のための美容支援活動を行う団体があり、すでに 40 万人以上の患者が恩恵を被っている。しかし、現時点では、現実の必要性が研究に先行している状態である。よりよい患者の支援のためには、エビデンスレベルの高い患者データに基づく支援プログラムの構築が不可欠である。

２．研究の目的

本研究の目的は、外見の変化に対応した患者サポートプログラムを構築し、それを臨床応用に展開するための研究基盤を確立することである。具体的には次の３つの段階応じた研究を行った。

（１）外見変化の実態とニーズに関する基礎研究：がん治療による外見変化の実態に関する横断的調査を継続し、心理的 well-being などに及ぼす影響を明らかにする。

（２）段階的サポートプログラムの作成研究：成人患者及び思春期患児に対する研究で得られた結果をベースに、さらに国内外での調査を実施し、段階的サポートプログラムの試案を作成する。

（３）プログラムの有用性の検証と普及に向けた予備的研究：プログラムの有用性を数量的に検証する前提として必要な質的研究や、現実にプログラムを普及させる際に不可欠なメンバーの選定や医療者の教育プログラムの作成研究に着手する。

３．研究の方法

以下では、研究の目的において提示した３つの段階に応じて述べる。

（１）外見変化の実態とニーズに関する基礎研究

① <u>がん患者の外見変化とその苦痛に関する定量的評価に関する研究</u>

【対象】外来化学療法を受けているがん患者で、初回治療から４週間以上経過している者

【方法】書面による承諾を得て自己記入式質問紙を配布し、郵送回収

② <u>治療による外見変化が思春期小児がん患児のＱＯＬに及ぼす影響に関する横断的調査研究</u>

【対象】がん専門病院に通院または入院中の 10 歳～20 歳の思春期小児がん患児

【方法】書面による承諾を得て自己記入式質問紙調査を実施

（２）段階的サポートプログラム（試案）の作成研究

① <u>養護教員の意識と思春期患児に対する外見支援プログラムの構成要素の検討</u>

【対象】東京地区に属する大規模病院の院内学級に勤務する養護教員（研究１）、治療中で 13 歳以上の患児（研究２）、

【方法】　質問紙による養護教員がもつ患児の外見に対する意識調査（研究１）とインタビュー調査（研究２）

② フランスにおける外見のサポートを通じた患者支援の実態調査

【対象】外見のケア先進国フランスにおいて、がん治療で有名な５病院と１患者会

【方法】医師・看護師・心理士・ソシオエステティシャン・患者会事務局長に対するインタビュー調査

③ 外見を通じた段階的サポートプログラム（試案）の作成研究

【対象】上記研究に参加した患者・患児および医療関係者、美容専門家

【方法】既に得られた研究結果をもとに、専門家と患者による多面的検討

（３）サポートプログラムの有用性の検証（①②）と普及（③④）に向けた予備的研究

① 外見関連の情報提供を中心とした患者サポートプログラムの有用性に関する予備的検討

【対象】コスメティックインフォメーション（第２段階プログラム）に参加した成人がん患者で、その後化学療法を体験した者、及び参加しなかった成人がん患者で、化学療法を体験した者。

【方法】Grounded Theory Approach によるインタビュー内容の分析。なお、本研究は、平成 21-23 年度厚労省科研費（がん臨床研究事業）「がん患者及びその家族や遺族が抱える精神心理的負担による QOL への影響を踏まえた精神心理的ケアに関する研究」（研究代表者清水千佳子）との共同研究である。

② 外見に問題をもつ人の心理的 well-being を測定する尺度短縮版の作成研究

【対象】大学病院の形成外科・口腔外科に通院中の患者と健康な成人男女

【方法】 DAS59 日本語版を作成した際のデータを再分析

③ チーム医療を担う美容専門家の資質に関する検討研究

【対象】がん診療連携拠点病医院の医療スタッフ（研究１）及び医療機関での勤務経験を有するフランス人美容専門家（研究２）

【方法】自己記入式質問紙調査（研究１）及びインタビュー調査（研究２）

④ 外見関連患者サポートプログラムの普及のための予備調査

【対象】がん診療連携拠点病院医療スタッフ

【方法】サポートプログラムの研修トライアルの際に、質問紙を配布して郵送回収

４．研究成果

研究の目的及び方法において提示した(1)から(3)までの研究の成果は、以下のとおりである。

（１）外見変化の実態とニーズに関する基礎研究

① がん患者の外見変化とその苦痛に関する定量的評価に関する研究

外来化学療法を受けている 18 歳以上のがん患者 753 名に対する質問紙を配布し 638 名（男性 264 名、女性 374 名：平均 59.54±11.70 歳）から有効回答を得た（回収率 84.7%）。80.3%の患者が、治療により変化した外見に懸念をもっていた。脱毛など、治療に伴い外見に現われる身体症状（＝外見症状:表黄色）64 項目のすべてに該当者がおり、その発現は多岐にわたることや、外見症状の中には、治療部分の痛みなどの一般的な身体症状よりも苦痛度の高いものがあった。また、疾患別・男女別に分析を行ったところ、外見症状に対する苦痛の感じ方や対象部位には明らかな性差や年齢差がみられ、男性より女性が、また高齢者より若年者のほうが外見の変化を苦痛に感じ、心理的 well-being が低かった。乳がん患者を例示する（次頁表参照）。その一方で、年齢に関わらず 97.4%の患者が、外見の変化とケアの情報は病院で与えられるべきと回答しており、外見に関するサポー

トニーズは極めて高いことが示された。現在、英文投稿中である。

	乳がん	
	Female (n=174)	
Rank	Symptom	Degree of Distress
1	髪の脱毛	3.47
2	手術による乳房切除	3.22
3	吐き気・おう吐	3.14
4	手足の指のしびれ	2.84
5	全身の痛み	2.82
6	眉毛の脱毛	2.77
7	睫毛の脱毛	2.76
8	手術による体の表面の傷	2.76
9	手の爪の割れ	2.75
10	手の爪の二枚爪	2.75
11	便秘	2.75
12	足の爪のはがれ	2.71
13	だるさ	2.71
14	口内炎	2.70
15	発熱	2.70
16	足のむくみ	2.64
17	手の爪のはがれ	2.61
18	味覚の変化	2.61
19	顔のむくみ	2.58
20	しみ・くま	2.57

② 治療による外見変化が思春期小児がん患児のＱＯＬに及ぼす影響に関する横断的調査研究

思春期小児がん患児 42 名（男性 17 名、女性 25 名）から回答を得た。高校生 17 名、中学生 8 名、大学生 7 名、その他 10 名である。相対的な投薬量の多さに連動して、身体症状・外見症状ともに成人より体験頻度が高かった。外見症状については、成人同様の性差が認められたほか、年齢の高い患児の方が年齢の低い患児より、外見の変化を強く感じていた。

（２）段階的サポートプログラム（試案）の作成研究

① 養護教員の意識と思春期患児に対する外見支援プログラムの構成要素の検討

研究１：養護教員 36 名に配布したところ、33 名から回答が得られた（有効回答率 91.67%）。男性 8 名・女性 25 名、年齢は 22～59 歳（38.90±11.03 歳）。養護教諭の 100%が心に価値をおきながらも、患児にとっての外見の重要性を認識していた。今後、プログラムの運営などに際して、積極的なサポートが得られる可能性がある一方で、治療の強さや外見の問題に対する基礎的情報の不足が示唆された。

研究２：対象者 7 名（男子１名・女子 6 名：平均 15.29 歳）全員が、手術・抗がん剤治療・放射線治療を体験していた。外見に関する体験エピソードと対処方法について面接内容を分析した結果、【外見の変化】【対人関係】【生活の不便さ】の３つのカテゴリーが抽出された。闘病生活の中で問題となる対処場面は、体育の授業や修学旅行など成長期の教育に必要な行事に関連することが多く、明らかに成人の場合のそれと異なっている。小児外見サポートプログラムへの提案としては、プログラムの内容に関する【外見変化の知識】【外見変化に対処する方法】【後輩へのアドバイス】と、運営方法に関する【プログラムの運営方法】が抽出された。患児は、小児用外見プログラムの作成に関して高いニーズをもち、その内容も具体的にイメージできていることが示唆された。

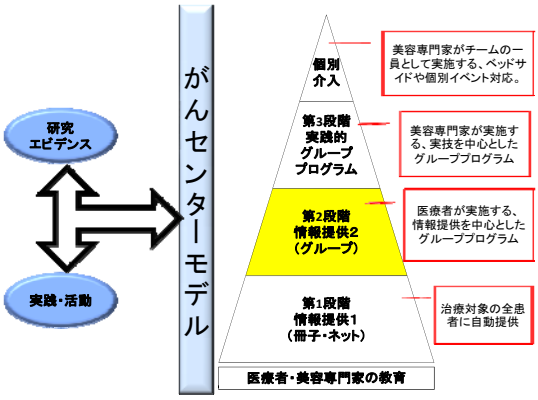
② フランスにおける外見のサポートを通じたがん患者支援の実態調査

外見の変化に対する最初の情報提供者は医師や看護師であり、日本と同様のシステムであったが、以前の調査時（2001、2003、2006 年）に比べ、医療に関わる美容専門家や施術内容のバリエーションが増加していた。そして着実に医療分野における美容ケアが広がりをみせる一方で、美容専門家の関わりに対する報酬が課題となっていることがわかった。また、乳房の予防切除術の普及に伴いそれに起因する心理的問題が生じていた。遺伝相談などが増加しつつある日本でも、

今後、大きな問題になり得ると予測された。

③　外見を通じた段階的サポートプログラム（試案）の作成研究

筆者らが 2007 年に日常臨床の中から着想した段階的患者サポートプログラム（がんセンターモデル）の必要性は、患者を対象とした一連の研究を通じて確認された。



そこで今回、基礎データや海外の情報も加えて、より精緻化した段階的プログラム第 1 試案を作成した。4 段階のなかでも、成人患者・患児・患児の保護者・医療者による検討の結果、医療者による情報提供を中心としたサポートプログラム（第 2 段階）の有用性が示唆された。美容専門家ではない医療機関にいる医療者が実施できるプログラムは、がん医療の均てん化という視点からも重要である。そこで、第 2 段階に焦点をあてたプログラムを作成した。「Ⅰ．情報とスキル編」「Ⅱ．メンタル編」「Ⅲ．アドバイス編」「Ⅳ．オプション編」から構成され、情報提供に遊びの要素なども取り入れている。すなわち、単純な情報の伝達ではなく、病気に対する理解や対処法の説明を通して外見の問題に対する認知の変化や自己評価を改善することが主目的である。基本的内容は、成人患者版も思春期患児版も同じであるが、具体的な説明方法や、患児の場合、周囲の理解も促進する必要がある点などが異なる。また小児の場合は、遊戯療法のように、遊びによってカタルシスを得ることも多いため、ウィッグやネイルで変身願望を満たしつつ遊ぶことが、病気に対する外見変化の受容を促進すると予測される。

（３）サポートプログラムの有用性の検証（①②）と普及（③④）に向けた予備的研究

①　外見関連の情報提供を中心とした患者サポートプログラムの有用性に関する予備的検討

医療者による第 2 段階プログラムが、患者に対してどのような影響をもたらしているのか、通院治療中の患者にインタビュー調査を行った。2012 年 3 月 31 日までに症例集積目標であった 30 名の調査を終え、現在そのデータの解析中である。

②　外見に問題をもつ人の心理的 well-being を測定する尺度短縮版の作成研究

外見の変化が患者の心理的 well-being に及ぼす影響を検証する際に、患者の負担を軽減し簡易に測定するためのツールの一つとして、DAS59 の短縮版（DAS12）を作成した。信頼性・妥当性も確認された。

③　チーム医療を担う美容専門家の資質に関する検討研究

段階的サポートプログラムを効果的に実施するには、チーム医療における美容専門家の資質が重要である。日本人看護師 54 名と病院に勤務する仏人美容専門家 8 名を対象に質問紙やインタビュー調査を実施したところ「高いコミュニケーション能力」「信頼できる人間性」「柔軟な判断に基づく対処能力」「自己コントロール力」が求められることが明らかになった。

④　外見関連患者サポートプログラムの普及のための予備調査

外見支援プログラムの発信を行う前提として、医療現場の外見支援の実態と、医療者の研修ニーズ等を調査した。研修ニーズが高い一方で現場での実施に困難を感じていることが示

された。

（4）まとめ

成人がん患者と思春期小児がん患児に対する2つの横断研究を実施し、その結果がん治療が外見にもたらす変化の実態と心理的苦痛、および、外見関連サポートプログラムに対するニーズの高さが明確になった。

次いで、患者サポートプログラムの作成研究を行い、対象とニーズに応じて4段階の患者サポートプログラム（がんセンターモデル）の試案を作成した。このようながん患者の外見の問題にフォーカスした大規模な数量的研究や、それに基づく外見関連患者サポートプログラムの作成研究は、国内外でも僅少である。

そして、これらのプログラムにより、患者の QOL を向上し、その治療意欲を高めて社会復帰の支援をすることは、がん医療の進展に貢献するものである。今後は、エビデンスに基づくさらなる改良と発展のために、サポートプログラムの検証と普及に向けた予備的研究を継続する必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12　件）

① 野澤桂子、チーム医療を担う美容専門家の資質に関する検討、山野研究紀要、査読有、20、1-8(2012)

② 野澤桂子、がん患者の外見変化に対するプログラムと心理的サポート、がん患者と対症療法、査読無、22、128-134（2011）

③ 野澤桂子・細野亜古、外見のサポートによる小児がん患児の QOL 改善プログラムの作成、山野研究紀要、査読有、19、1-8（2011）

④ 野澤桂子、フランスにおける外見のサポートを通じたがん患者支援の現状、山野研究紀要、査読有、19、28-36（2011）

⑤ 野澤桂子、高齢社会における美容の可能性、山野研究紀要、査読有、18、11-17（2010）

⑥ 野澤桂子、高齢がん患者の外見変化への懸念、日本心理学会第 73 回大会論文集、査読無、257(2010)

⑦ Hashimoto K, Yonemori K, Shimizu C, Hirakawa A, Yamamoto H, Ono M, HirataT, Tamura K, Katsumata N, Ando M, Fujiwara Y. A retrospective study of the impact of age on patterns of care for elderly patients with metastatic breast cancer. Med Oncol 査読有(2010)　ほか

〔学会発表〕（計 13　件）

① 野澤桂子、若年乳癌患者における外見変化への対処行動の実態、日本がん看護学会学術集会（2012 年 2 月）

② 高橋由美子・清水千佳子・野澤桂子 乳がん患者の外見関連副作用の実態～組織的な支援プログラムの導入にむけて～、日本乳癌学会総会学術集会（2010 年 6 月）

③ 野澤桂子、がんの治療に伴う外見の変化と心理的苦痛の性差、日本心理学会大会（2010 年 9 月）

④ 細野亜古・野澤桂子・牧本敦他、Cosmetic Program による思春期小児がん患者の QOL 改善の試み、日本小児がん学会学術集会（2010 年 12 月）

⑤ 伊藤暖子・清水千佳子・野澤桂子他、がん治療の副作用の頻度と苦痛度の実態に関する研究、日本臨床腫瘍学会学術集会（2010 年 3 月）

⑥ 細野亜古・野澤桂子他、思春期小児がん患者における治療による外見変化が QOL に及ぼす影響に関する横断的調査研究、日本小児癌学会学術集会（2009 年 11 月）

⑦ 野澤桂子、化粧行動の健康心理学～がん医療における外見のケアと Quality of Life～、日本健康心理学会大会シンポジウム（2009 年 9 月）　ほか

〔図書〕（計 2 件）

① 野澤桂子・和泉秀子、がん患者の QOL を高めるケア「外見変化のケア」、看護技術 P30-33 メジカルフレンド社（2010）　ほか

６．研究組織

(1)研究代表者

野澤　桂子（NOZAWA KEIKO）
山野美容芸術短期大学
美容総合学科・教授
研究者番号：30269449

(2)研究分担者

清水　千佳子（SHIMIZU　CHIKAKO）
国立がん研究センター中央病院
乳腺科・腫瘍内科・医員
研究者番号：10399462

沢崎　達夫（SAWAZAKI　TATSUO）
目白大学・人間科学部・教授
研究者番号：90143180